

禪の「笑い」

—その本質と現象—

はじめに

一、向上の「笑い」

—摩訶迦葉—

二、原初の「笑い」

—百丈懷海—

三、慈悲の「笑い」

—巖頭全竊—

四、開悟の「笑い」と悟後の「笑い」

—香巖智閑—

五、主客未分の「笑い」

—仰山慧寂および菴山惟儼

おわりに

安 永 祖 堂

はじめに

禅仏教とキリスト教カトリックは、ともにその修道生活に於て、原則として、「笑い」が禁じられている。

現今、日本の臨済宗叢林に於て、統一された規則こそないが、雨安居、雪安居の結制に當つて読み上げられる規定に、「高談戲笑を禁ず」という一節のない叢林はないであらう。

同様に、現在西欧のカトリック修道院生活が拠っている「ベネディクト会会則」(修道院制度の創設者であるヌルシアのベネディクトウスの定めたもの)でも、修道士に対して「空虚な言葉や笑いを生ぜしめるような事柄を口にしないこと、大笑や高笑を好まぬこと」を命じている。^①

しかしながら「笑い」の否定だけが、キリスト教の教説から導き出される唯一の在り方ではない。イエスは言う。「今泣いている人々は幸いである。あなたがたは、笑うようになる」(ルカ六・二十一)。キリスト教の歴史を見ても、「笑い」について積極的評価はその時代や、社会状況により変化しながら、いまままた変化しつづけている。^②

このような「笑い」の肯定は、禅にあつてもまた同様である。それどころか「寒山拾得図」のモチーフに象徴されるが如く、禅はかえつて「哄笑」の宗教であるとさえ言うるのである。当然ながら禅籍祖録の中には、様々な禅の「笑い」が見られるわけである。

たとえば『五灯会元』には、「呵呵大笑」、「笑」、「哂」、「嗤」など、笑いに関連する語が八十五箇所も頻出し、そのうち禅者が問答商量などに於いて「笑う」事例が七十一例も記載されている。(注③の引用例を参照。)

それら禅者達の「笑い」を通覧するとき、われわれは、禅者がいかなる場合に、いかなる理由によつて笑つたかという点に於いて、いわゆる禅の「笑い」というものに共通する性格を見ることができよう。

拙論では、特に摩訶迦葉、百大懐海、巖頭全藏、香巖智閑、仰山慧寂、葉山惟儼の「笑い」を採りあげて、禅の「笑い」に通底する一般性、およびその本質的内容について考察を加えてみたい。

1. 向上の「笑い」

— 摩訶迦葉 —

『大梵天王問仏決疑經』拈華品第二に見える摩訶迦葉の「笑い」は、たとえば『五灯会元』卷一、釋迦牟尼佛章に見え、また『無門関』にも第六則の話頭として以下のように採用されている。

六、世尊拈花

世尊、昔、靈山会上に在つて花を拈じて衆に示す。是の時、衆皆な默然たり。惟だ迦葉尊者のみ破顔微笑す。世尊云く、「吾に正法眼蔵、涅槃妙心、実相無相、微妙の法門有り。不立文字、教外別伝、摩訶迦葉に付嘱す」。傳統的解釈によれば、迦葉の破顔微笑は、花をさし出した世尊の意思を、迦葉が無言のうちに了解した「笑い」であり、それは禪の伝達の本質である以心伝心の場面を示すものとされている。

しかし、迦葉の「笑い」は、ただにそれだけの「笑い」ではないであろう。そればかりか無門慧開（一一八三—二六〇）の評に、

黄面の瞿曇、傍若無人。良を庄して賤と爲し、羊頭を懸げて狗肉を売る。將に謂えり多少の奇特と。

とあるように、無門慧開は世尊より更に一段高い立場に立つて、世尊をさえ批評しているのである。実はこの無門慧開の姿勢は、すでに迦葉の「笑い」の中にも含まれていたものであろう。迦葉は世尊の意思を勘破（『碧巖録』第四則、雪竇重頤の著語）すると同時に、「笑破」しているのである。

迦葉は、世尊の真意を見破したのみならず、同時に世尊より高い立場からこれを笑破している。いわば、迦葉の「笑い」には、「笑い」をも超える「向上の笑い」とも呼ばれるべき高次の「笑い」が含まれている。

ここに筆者が「向上の笑い」と呼ぶものは、従上の仏祖の境位をさらに超え出た時に、おのずから発せられる「笑い」を意味している。

迦葉は世尊その人を、或はまた花を拈じるといふ世尊の行為をも笑っている。のみならず、そのような仕方を用いては表現や伝授ということがなされ得ない仏法そのものありようまでもこれを笑い、さらにそのような仏法に對峙した瞬間に笑わざるをえない自己そのものをも、自笑している。

キリスト教にあつては、「笑い」は、瀆聖的で侵犯的なものと考えられてきた。「笑い」を悪魔的なものを追い払う手段と考えたトマス・モアやルターは、例外である。(『笑いの本質について』ボードレール、『フロイトと機知』サラ・コフマンを参照。)

神を笑うことは許されない。神を笑うことが許されれば、世界は再びカオスを迎える。スコラ神学にあつては、悪魔を笑うことも許されない。悪魔への恐れがなければ、神はもはや必要とされない。「笑い」は恐れをなくす。恐れなくしてキリスト教の信仰は成り立たないのである。

しかし、禅にあつては、むしろそのような「笑い」の瀆神性、瀆聖性つまりは、瀆仏性、瀆悟性を十二分に知悉して、禅者は巧妙かつ積極的にこれを利用したというべきである。「超越祖」を表現するものとして、「笑い」は格好の手段となる。

その意味に於いて、禅に於ける「向上の笑い」は、単にベルクソンのいう「優越の笑い」でもなければ、パニョルの「勝利の笑い」でもない。禅の「笑い」は、両刃の剣なのである。向上の立場にあつて笑う主体になったその瞬間に、自らもまた「笑い」の対象に成り下がるのである。自らを鼻持ちならぬ野狐禅、禅天魔として嘲笑する。それすら恐れず敢えて笑うところに、禅者の大慈大悲の血滴々を見ることが出来る。

このようにして迦葉の「笑い」は、「以心伝心の笑い」であるとともに、「向上の笑い」でもある。また、「笑破」すると同時に「笑破」されるという意味に於いては、ウロボロスの「笑い」でもある。

前述の如く、この一場の付法劇は、『大梵天王問仏決疑經』という偽經にその出典を持つ。一体何故この偽經の作者

はこのような付法劇によって迦葉を笑わせようとしたのであろうか。その問いに答えようとする瞬間、この作者の顔のない、口のない「笑い」が響きわたる。萬華鏡の硝子板の如き偽経の作者の「笑い」に包まれた中で、迦葉の「笑い」が様々な表情を見せてくる。それを覗きこもうとする者は、たちまちその無底の陥穽に突き落とされてしまふのであろう。

二、原初の「笑い」

— 百丈懷海 —

『五灯会元』卷三、百丈懷海（七四九—八一四）章に以下の記述がある。

師、馬祖に侍して行く次で、一羣の野鴨の飛び過ぐるを見る。祖曰く、是れ什麼ぞ。師曰く、野鴨子。祖曰く、甚處にか去る。師曰く、飛び過ぎ去れり。祖、遂に師の鼻を把んで扭る。負痛失聲す。祖曰く、又た飛び過ぎ去れりと道う。師、言下に省有り。待者寮に却歸り、哀哀と大哭す。同事問うて曰く、汝、父母を憶うや。師曰く、無。曰く、人に罵られしや。師曰く、無。曰く、哭するは甚麼と作てか。師曰く、我が鼻孔大師に扭得られて痛不徹。同事曰く、甚の因縁有つてか契わざる。師曰く、汝、和尚に問取し去れ。同事、大師に問うて曰く、海待者は何の因縁有つてか契わらずして、寮中に在つて哭するや。和尚に告う、某甲が為に説け。大師曰く、是れ伊會せり、汝自ら他に問取せよ。同事、寮に歸つて曰く、和尚道えり、汝會せりと。我をして自ら汝に問わしむ。師乃ち呵呵大笑す。同事曰く、適來は哭せしに、如今甚と為てか却つて笑う。師曰く、適來は哭し、如今は笑う。同事、罔然たり。

「百丈野鴨子」の公案（『碧巖録』第五十三則）として知られるものの前半では、百丈は馬祖に鼻をねじり上げられて大悟した因縁を伝える。本来の面目が馬祖にねじり上げられて、百丈の実存が地軸を揺るがして転換したのである。

「哀哀大哭」と「呵呵大笑」のコントラストが効いている後半部に注目してみよう。

待者寮に帰って激しく泣いていた百丈に同役の者が問いを重ね、更に馬祖の言葉を伝えると、「適來は哭し、如今は笑う」となる。

「歎び」と「笑い」とは峻別されなければならない。「歎び」は、それ自体として存在するもので、それが様々な形をとって顕れるというボードレールの考えは、その意味に於いて正しい。

では、百丈の「哀哀大哭」と「呵呵大笑」は、「歎び」の表現、情的対処の方向性の違いにすぎないと解釈してよいかとなると疑問が残る。百丈は馬祖の言葉に反作用して笑ったのではない。そもそも「笑い」の原動力は笑う者の裡にあり、「笑い」の対象の裡にあるわけではない。「呵呵大笑」は、「哀哀大哭」のメタモルフォーゼであり、百丈の裡にある本質には何の変化もないであろう。ジョン・デューイ（一八五九—一九五二）は、その著『経験と教育』に於いて次のように言う。

経験とは単に人に起ったことではなく、人が出会った事柄すべてに対するその人の意識的な理解と対処である。キリスト教神秘主義の「なった」と、禅仏教の「だった」の表現の違いである。合一体験にあってキリスト教神秘主義者は、神と一つになったと言う。禅者は、仏と一つだったと言う。合一体験は、宗教的自我というフィルターを再び通過して追証されるだけの存在にすぎない。

経験の素体、原経験の段階に於いては、経験は経験と呼ばれることすら拒絶する。それは禅にあっては、大悟の間、禅的安心の極地、歎喜の時でもある。その瞬間にあっては歎喜という表現すらすでに副次的である。

原悟体験から派生して「哀哀大哭」、さらに「呵呵大笑」というのではない。すでに原悟体験にあって「哀哀大哭」であり「呵呵大笑」なのである。故に「哀哀大哭」と「呵呵大笑」は、歎喜を蝶番にして回転しあっている。

このような場合の禅の歎喜の「笑い」を「原初の笑い」と呼ぶ。静的かつ動的であり、超空間的であって超時間的

である。無邪気に笑う分別以前の新生児の「笑い」、生命のよろこび、いのちの弾ける「笑い」である。すべての禪の「笑い」は、この「原初の笑い」の事後に形成される。

三、慈悲の「笑い」

— 巖頭全竅 —

『五灯会元』巻七、巖頭全竅章の巖頭全竅（八二八—八八七）の二例目の「笑い」を見てみよう。

僧に問う、甚處より來る。曰く、西京より來たる。師曰く、黄巢過ぎし後、還た劔を収得せしや。曰く、収得せり。師、頸を引べて近前して曰く、因。曰く、師の頭落ちぬ。師、呵呵大笑す。

『碧巖録』第六十六則に収めるこの巖頭の「笑い」とは如何なる「笑い」か。『碧巖録』本則の圓悟克勤（二〇六—二一三五）の評唱に次のようにある。

巖頭大笑するは、他の笑中に毒有り。若し人の辨得するものあらば、天下に横行せん。

圓悟によれば、巖頭の「呵呵大笑」には毒があると言う。しかしそれは、スウィフト的な嗤笑ではなく、禪独特の毒をもつ「笑い」である。禪に参じようという程の人ならば、一度はこの毒に当たって大死一番、さらに大活現前しなければならぬということである。「笑い」そのものが「祖師の関」であり、巖頭の「笑い」こそは、そのような作意を含む「笑い」である。

巖頭の毒ある「笑い」は、一見したところ相手の僧の愚かさを笑っているようではあるが、実際はこの僧を悟らせようとしている慈悲の「笑い」でもある。

それは毒のある「笑い」であり、北魏（五世紀頃）から、随・唐（七世紀頃）にかけて製作された佛像群の口辺に浮かぶ「アルカイツク・スマイル」のような穏やかな微笑ではない。むしろデイモニアックである。それを言うのが、

次に見る圓悟の頌の評唱である。

這箇の些子、天下の人模索不著。且道、他箇の什麼をか笑う。須是らく作家にして方めて知るべし、這の笑中に権有り実有り、照有り用有り、殺有り活有ることを。

圓悟によれば巖頭の「笑い」の中には、洞察があり、働きがあり、殺活自在の方便がある。そのような大機大用を含んだ複雑な「笑い」は、達道の人でなくてはわかるまいと言う。

「笑面は慈悲に当り、苦心は悪毒を含む」(『中峰広録』九)の一句が、まさに巖頭の「笑い」が、単に制裁の「笑い」や嘲笑でないことを示すものである。

四、開悟の「笑い」と悟後の「笑い」

—香巖智閑—

『伝灯録』卷十一、香巖智閑伝に見える香巖智閑(？—八九八)の「笑い」はどうか。

南陽に抵り、忠國師の遺跡を覩、遂に憩止す。一日、因みに山中に草木を芟除するに、瓦礫を以て竹を撃つて聲を作す。俄かに失笑する間、廓然として省悟す。

「俄かに失笑する間」、思わず笑つてしまふとは如何なることか。

ハロルド・ニコルソン(一八八六—一九四七)に、「笑いについての四つの主要な公理」がある。公理の一は、自負心の理論。二は、下降的不調和の理論。三は、束縛からの解放の理論。四は、自由な活動に対立するものとしての機械的動作の理論である^④。

公理の二、下降的不調和の理論を支えるのは、ハーバート・スペンサー(一八二〇—一九〇三)の「意識が大きな事柄から小さい事柄へ思いがけなく移行させられたとき、つまり我々が(下降的不調和)と呼ぶものが生じた場合に、

笑いを生じる」という主張。或いはカント（一七二四—一八〇四）の「笑いは、張り切った期待が突然に無に変わるときに生じるある種の感情」という定義。またリップス（一八五一—一九一四）の「笑いは、深い意味をもった、もとは感動的なあるものが、突如としてその意味や感動的なものを失ったときに生じる」、という解釈などである。

瀧山で縁が契わず、慧忠国師の塔所にあつた香巖は、竹を撃つた声によって思いがけなく突然に開悟した。その瞬間、彼の無限の苦悩は、あつけなく崩れ落ちたのである。その瞬間の香巖の心情は、大愚の下で発した臨済の「元来黄檗の仏法多子無し」という叫びに通ずるものである。入矢義高氏は言う。

無多子とは、あれやこれやの面倒なことではない。端的である。従来の「大したことはない」「たわいもない」と解するのは誤り。（岩波文庫本『臨済録』一八三頁）

しかし、従来の「大したことはない」という解釈が長く支持されてきたのは、それが禪者の心情にあまりに合致するからである。

故に、香巖の失笑には、下降的不調和の「笑い」の側面があるとも言えるが、その「笑い」は、決して開悟の「笑い」ではない。それはすでに反省的な悟後の「笑い」である。

禪者が全身一箇の大疑団となつて悩み、有限相對の縛を切つた時点に起る「笑い」は、すでに認識論的な「笑い」であり、見性開悟の端的の「笑い」ではなく、二次的、副次的な「笑い」である。

開悟の瞬間、香巖の場合では、瓦礫が竹を撃つた瞬間、その刹那に香巖の本来の自己が瓦礫に撃たれている。その時に香巖の唇を緩ませた「笑い」には、分別の余地すら無い。それが開悟の「笑い」であり、悟後の「笑い」が続いて思はず洩れる。

開悟の「笑い」と悟後の「笑い」との間には、時間的な経過を考慮する必要がある。「俄かに失笑する間、廓然として省悟す」の一節の「間」の一字の意味はそこにある。失笑する「前」でなく、失笑する「時」でなく、失笑する「後」

でなく、失笑する「間」なのだ。

なお香嚴の「笑い」に関しては、西村恵信氏の詳細な考察がある。（『己事究明の思想と方法』四六八頁参照。）

五、主客未分の「笑い」

— 仰山慧寂と葉山惟儼 —

『五灯会元』卷十一、三聖慧然章の仰山慧寂（八〇七—八八三）の「笑い」は、『碧巖録』第六十八則に引かれている。

挙す。仰山、三聖に問う、汝の名は何ぞ。「名実相奪う。賊に勾りて家を破らる。」聖云く、慧寂。「舌頭を坐断す。旗を奪り鼓を奪う。」仰山云く、慧寂は是れ我なり。「各自に封疆を守る。」聖云く、我が名は慧然。「鬧市裏に奪い去る。彼此却つて本分を守る。」仰山、呵呵大笑す。「是れ箇の時節と謂うべし。錦上に花を鋪く。天下の人落処を知らず。何故ぞ。土曠く人稀にして、相逢う者少なし。一に巖頭の笑うに似て、又た巖頭の笑うに非ず。一等く是笑うに、為什麼にか却つて両段と作る。具眼の者は始めに定当し看よ。」

圓悟の下語に言う。

一に巖頭の笑うに似て、又た巖頭の笑うに非ず。

仰山の「笑い」は、先の巖頭の「笑い」に似てはいるが、それとこれと同じではない。巖頭の「笑い」は、相手の僧の愚かさを笑っているようで、なお僧を悟らせようという禅者一流の慈悲のあらわれとも言うべき、毒のある作為の「笑い」という趣きがあった。それに対して仰山の「笑い」にいたっては、巖頭の毒ある作為の「笑い」を超えた「笑い」が、別の次元に大きく響きわたっている。『碧巖録』本則、圓悟の評唱には以下の如く説かれている。

這箇の笑いは巖頭の笑いと同じからず。巖頭の笑いは毒葉有り、這箇の笑いは、千古万古、清風凜凜地なり。

巖頭と仰山と両者の「笑い」の対象を比較してみよう。仰山の「笑い」が巖頭の「笑い」と質的に異なる理由があるとすれば、それは「笑い」の対象の人物の優劣に起因するであろう。巖頭の「笑い」は未熟な僧に対してしている。しかし、仰山の「笑い」は、得道の人三聖に対してしている。さらに仰山の「笑い」は必ずしも三聖を意識していない。その必要がないからである。何故ならば、仰山も三聖も大悟徹底の禅者、知音同志でもあるからである。二人はともに同じ世界に遊んでいる。

『華嚴経』のターミノロジーを用いれば、人人無礙法界に逍遙している。唯仏與仏が、唯笑與笑となっている。仰山の「笑い」は、三聖に共鳴している。この「笑い」を「主客未分の笑い」と呼ぶ。「主客未分の笑い」とは、笑う主体と笑われる客体とに分れる以前の世界の「笑い」をいう。

西洋に於ける「笑い」の理論的遺産は、おおよそコントラストの理論と優越の理論の二つに分類できる。メンデルスゾーン（二七二九—一七八六）の「完全と不完全」、レッシング（二七二九—一七八二）の「美と醜」、ジャン・パウ（二七六三—一八二五）の「無限な理念と有限な世界」、ショーペンハウエル（二七八八—一八六〇）の「概念と実際」、リップス（前出）の「大なる期待と小なる現実」、これらの両者のコントラストに於いて「笑い」を説明しようとするのが、コントラストの理論である。

ホップス（一五八八—一六七九）の「突然に生じた優越」、パニョル（一八九五—一九七四）の「勝利の凱歌」、ベルクソン（一八五九—一九四一）の「機械化された個人に対する社会の制裁」など、対象に対しての己の優越という考えを「笑い」の理論の基礎におくのが優越の理論である。

いづれにせよ、コントラストの理論では二つの笑いの対象の存在を前提としており、優越の理論では、笑う主体と笑われる客体の二つの存在を前提としている。

これらの二元的理論では、禅の「主客未分の笑い」は到底説明出来ない。二元的な相対と絶対を超越した超絶的に

於いて響きわたる「笑い」こそが、「主客未分の笑い」である。

「笑う」という動詞も他動詞から自動詞へと転換し、自動詞的「笑い」という名詞的表象も昇華する。一切の形容詞を受けつけない故にである。

そもそも「見性」という語が、すでにこのような主客未分の世界の消息を示している。「見性」とは、「仏性を見る」のではなく、「仏性が見れる」のである。「見性成仏」とは、「性を見て仏と成る」の如く主体と客体に分けない。「見れた性は成った仏」という修飾並列関係なのだ。

そのような主客未分の世界に響きわたる禅独特の「笑い」は、相対的な時間の制約をも超えている。圓悟は言う。

千古万古、清風凜凜地なり。

一千年、一万年というような相対的な時間の制約を超えてなお「笑い」が響きわたっているのである。仰山と三聖の「笑い」は、ハーモニーでなくユニゾンとなって響いている。故に得道の人ならば、何時でもともに笑えるのだ。「主客未分の笑い」は、相対的な空間の制約も超える。それを示すのが、『伝灯録』卷十四に見える薬山惟儼（七四五―八二八）の「笑い」であろう。

師、一夜登山經行す。忽ち雲開いて月を見る。大笑一聲す。澧陽東九十許里の居民盡く謂う東家なりと。明晨、迭に相推問して直に薬山に至る。徒衆云く、昨夜和尚山頂に大笑す。李翱再び詩を贈りて曰く、選得幽居愜野情、終年無送亦無迎、有時直上孤峯頂、月下披雲笑一聲。

薬山は、煩惱の迷いの雲が晴れて真如の悟りの月が顔を出したのを見て笑った。その「笑い」は、開悟の「笑い」とも、或はそのような悟りのメタファーである月を笑いとはす向上の「笑い」とも解釈出来る。

だがここで注目すべきは、菓山の「笑い」が、九十里離れた近隣の村々にまで響きわたったという表現である。相対的な時空間の制約を超えて響きわたる「笑い」という点に於いて、仰山と菓山の「笑い」は、同じ世界を共有しているように見える。

おわりに

アリストテレスは言う。「動物の中で笑うものはヒトだけである。」同じく動物の中で宗教を信じるものはヒトだけである。「笑い」と宗教は、人間の深い部分で重なりあっているのかもしれない。

それぞれの宗教の中での「笑い」の評価を位置づけ、それを坐標軸に比較していけば、比較宗教学的な研究も可能であろう。

限られた例ながら、禅の「笑い」について考察を加え、それぞれのケースに禅独自の「笑い」を示すと思われる名称を与えた。それらは、「以心伝心の笑い」、「向上の笑い」、「作為の笑い」、「慈悲の笑い」、「主客未分の笑い」、「原初の笑い」、「悟後の笑い」等であった。

いまそれらを更に大別して、禅の「笑い」の三大(体—本体、相—すがた、用—はたらき)とする。

禅の「笑い」の「体」には、「原初の笑い」があてはまる。意識分別の入る余地のない、生命のよろこび、新生児の無我無心の「笑い」である。

「相」に相当するものは、「主客未分の笑い」、「以心伝心の笑い」などであろう。それらは二元分別以前の根底的世界の「笑い」、相対的時空間の制約を超えて響きわたっている「笑い」である。

「用」としては、「向上の笑い」、「作為の笑い」、「慈悲の笑い」、「悟後の笑い」等が属しよう。絶対的無の世界において相対的有の世界を笑い、また相対的有の世界にあって絶対的無の世界を笑う。時には両方の世界とともに笑い、そ

して両方の世界の根源の世界をも笑う。

禪の「笑い」は多様であるが、現在の我々にもっとも必要な禪の「笑い」は何かと問うなれば、筆者は迷わず「向上的笑い」と答える。

かつて、久松真一は、「逢仏殺仏、逢祖殺祖」という『臨濟録』の語を依用して、「殺仏殺神」という言葉を現代社会に向けて提起した。

筆者は、さらにそれを「笑仏笑神」として問い直してみたい。「仏を笑い、神を笑う」それこそが、特に現代に必要な「向上的笑い」というべきものではなからうか。いまや我々は「死笑」に参ずることなく、「活笑」に参じねばならないであろう。禪の「笑い」は、現代に生きる我々に、様々な問題を課しているように思われる。

注

① The Rule of Saint Benedict for Monasteries (Ealing Abbey, 1969) 十三頁および二十一頁参照。

② 宮田光雄著『キリスト教と笑い』(岩波新書、一九九二年) 参照。

③ 『五灯会元』(廣文書局、民国六十年版、圈点筆者)

- 1 世尊在靈山會上、拈花示衆。是時衆皆默然、唯迦葉尊者破顏微笑。(卷一、釋迦牟尼佛章)
- 2 同事歸寮日、和尚道汝會也、教我自問汝。師乃呵呵大笑。(卷三、百丈懷海章)
- 3 師曰、一隊漢向這裏覓甚麼。以棒趣出。大笑。歸方丈。(卷三、歸宗智常章)
- 4 趙州問、般若以何爲體。師曰、般若以何爲體。州大笑而出。明日、州掃地次、師曰、般若以何爲體。州置帚、拊掌大笑。(卷四、大慈寰中章)
- 5 千把定其僧日、是你怎麼累我亦然。便打一擱。用大笑日、朗月與青天。(卷四、東山慧章)

- 6 僧近前、却退後。師曰、父母俱喪、略不慘顏。僧呵大笑。(卷五、孝義性空章)
- 7 師曰、還逢見魚鼈麼。曰、往往遇之。師曰、遇時作麼生。韶曰、咄、縮頭去。師大笑。(卷五、白雲約章)
- 8 龍牙問、學人仗鎧、鄧劍擬取師頭時如何。師引頸近前日、因。牙曰、頭落也。師呵呵大笑。(卷七、德山宣鑿章)
- 9 師至僧堂前、拊掌大笑曰、且喜堂頭老漢會末後句、他後天下人不奈伊何、雖然也祇得三年活。(卷七、巖頭全竅章)
- 10 師曰、黃巢過後、還收得劍麼。曰、收得。師引頸近前日、因。曰、師頭落也。師呵呵大笑。(卷七、巖頭全竅章)
- 11 師呵呵大笑曰、陳老師自入福建道洪塘橋下一寒、未曾見有箇毛頭星現。(卷七、羅山道閑章)
- 12 師曰、滿肚是禪。曰、和尚是甚麼心行。師大笑而已。(卷七、香谿從範章)
- 13 師問峯曰、從上諸聖傳受一路、請師垂示。峯良久、師設禮而退。峯乃微笑。(卷七、長慶慧稜章)
- 14 師曰、早朝粥、齋時飯。曰、更請和尚道。師曰、老僧困。曰、畢竟作麼生。師大笑而已。(卷七、龍興宗靖章)
- 15 仰擬再舉、被庵主踏倒。仰歸舉似師。師呵呵大笑。師在法堂坐、庫頭擊木魚、火頭擲却火抄、拊掌大笑。(卷九、滄山靈祐章)
- 16 師曰、子又作麼生。仰亦珍重出去。師呵呵大笑日、如水乳合。(卷九、滄山靈祐章)
- 17 師曰、大丈夫何必相試。塔韞切丑忍、然而笑、遂乃印可。(卷九、清化全怱章)
- 18 師曰、不是河南、便歸河北。槩便打。師約住與一掌、槩大笑。(卷十一、臨濟義玄章)
- 19 山問、汝名甚麼。師曰、慧寂。山曰、慧寂是我名。師曰、我名慧然。山大笑而已。(卷十一、三聖慧然章)
- 20 又到德山、纔展坐具。山曰、莫展炊巾、這裏無殘羹餽飯。師曰、縱有也無著處。山便打。師接任棒、推向禪牀上。山大笑。
- (卷十一、三聖慧然章)
- 21 僧問、和尚這裏忽遇大蟲、作麼生。師便作大蟲吼。僧作怖勢。師大笑。(卷十一、桐峯庵主章)
- 22 師良久、僧曰、死却這老漢。師便打。僧無語。師呵呵大笑。(卷十一、桐峯庵主章)
- 23 師曰、誰。僧便喝。師便打。僧出外回首曰、且待、且待。師大笑。(卷十一、桐峯庵主章)
- 24 師曰、山僧招得。僧拂袖出去。師笑曰早知如是、悔不如是。(卷十一、竹園山章)
- 25 傾愛之、遂拜跪、請曰、神鼎乃我家植福之地、久之宗匠、願師俱往、如何。師笑而諾之。(卷十一、神鼎洪誣章)

- 26 年拊膝曰、這裏是甚麼所在。師拍掌曰、也不得放過。年大笑。(卷十二、石霜楚圓章)
- 27 師曰、內翰疑則別參。年曰、三脚蝦蟆跳上天。師曰、一任蹉跳。年乃大笑。(卷十二、石霜楚圓章)
- 28 師曰、甚麼處得此消息。公便喝。師曰野干鳴。公又喝。師曰、恰是。公大笑。(卷十二、石霜楚圓章)
- 29 其下注曰、若人識得、不離四威儀中。首座見曰、和尚今日放參。師聞而笑之。(卷十二、石霜楚圓章)
- 30 師接住、推明置禪牀上、明却作虎聲。師大笑曰、我見七十餘員善知識、今日始遇作家。(卷十二、芭蕉谷泉章)
- 31 相別而今又半年、不知誰共談禪、一般秀色湘山裏、汝自匡徒我自眠。明覽笑而已。(卷十二、芭蕉谷泉章)
- 32 僧曰、自古無生曲、須是遇知音。師曰、波斯入唐土。僧大笑。歸衆。(卷十二、洞山子圓章)
- 33 何故、是法平等、無有高下、是名阿耨多羅三藐三菩提。良久、笑曰、向下丈長。(卷十二、瑞巖智才章)
- 34 滄失笑曰、我將謂這矮子有長處、元來祇在這裏。此子向去、若有箇住處。(卷十三、疎山匡仁章)
- 35 師曰、忽遇樹倒藤枯、句歸何處。滄放下泥槃、呵呵大笑。(卷十三、疎山匡仁章)
- 36 師曰、和尚且瞌睡。拂袖便行。頭呵呵大笑曰、三十年弄馬騎、今日被驢撲。(卷十三、疎山匡仁章)
- 37 雲門出問、庵內人爲甚麼不知庵外事。師呵呵大笑。(卷十三、越州乾峰章)
- 38 王公泣曰、師忍棄弟子乎。師笑曰、借千年亦一別耳。(卷十三、重雲智暉章)
- 39 初遊方、問雪峯、如何是雪峯的的意。峯以杖子敲師頭。師應諾。峯大笑。(卷十四、上藍慶章)
- 40 通曰、上座曾見甚麼人來。師曰、浮山。通曰、怪得恁麼頑賴。遂握手相笑。歸方丈。(卷十四、投子義青章)
- 41 僧問、三世諸佛向火焰裏轉大法輪、還端的也無。師大笑曰、我却疑着。(卷十四、長蘆清了章)
- 42 自到天衣、蚤夜精勤、脇不至席。一曰、偶失笑。喧衆、衣擯之。(卷十四、吉祥元實章)
- 43 師曰、老鼠窟。正曰、放猫兒入好。師曰、試放看。師拊掌笑。(卷十五、舜峰義韶章)
- 44 師跳下禪牀、攔胸擒住、叫曰、賊、賊。那將帽子覆師頂曰、天寒且還和尚。師呵呵大笑、那便出去。(卷十五、北禪智賢章)
- 45 師笑曰、吾年八十一、老死昇屍出。兒郎齊著力、一年三百六十日。言畢而逝。(卷十五、玉泉承皓章)
- 46 上堂、是甚麼物、得恁頑厲瞞瞞眼。拊掌呵呵大笑曰、今朝巴鼻、直是黃面瞿曇通身是口、也分疏不下、久立。(卷十六、棲賢智遷章)

- 47 上堂、昨夜四更起來、呵呵大笑不歇。幸好好一覺睡、霜鐘撞作兩槓。(卷十六中際可遷章)
- 48 默坐公堂虛隱几、心源不動湛如水、一聲霹靂頂門開、喚起從前自家底。慧開笑曰、趙悅道撞彩耳。(卷十六、清獻趙抃居士章)
- 49 僧曰、此是香巖底、和尚又作麼生。師便喝、僧大笑。師叱曰、這野狐精。(卷十六、雲峰大智章)
- 50 僧問、如何是佛。師呵呵大笑。僧曰、何晒之有。師曰、笑你隨語生解。曰、偶然失利。師喝曰、不得禮拜。僧便歸衆。師復笑曰、隨語生解。(卷十七、寶峰克文章)
- 51 良久曰、無價夜光人不識、識得又堪作甚麼、凡夫虛度幾千春。乃呵呵大笑曰、爭如獨坐明牕下、花落花開自有時。(卷十七、興國契禪章)
- 52 寒山拊掌欣欣、拾得呵呵大笑。大衆、二古聖笑箇甚麼。良久、呵呵大笑曰、曇花一朶再逢春。(卷十七、棲真德嵩章)
- 53 忽語邑人曰、吾明日行脚去、汝等可來相送。於是齋路者畢集、師笑不已。(卷十八、永豐慧日章)
- 54 師便喝。元日、這座主、今日見老僧氣衝牛斗。師曰、再犯不容。元拊掌大笑。(卷十八、尊勝有朋章)
- 55 壬戌歲、持至、見其尚存、作偈嘲之曰、咄哉老性空、剛要餒魚籠、去不索性去、祇管向人說。師閱偈笑曰、待兄來證明耳。(卷十八、性空妙普章)
- 56 師乃援馬祖百丈機語、及華嚴宗旨爲表。源笑曰、馬祖百丈固錯矣、而華嚴宗旨與箇事喜沒交涉。(卷十八、法輪應瑞章)
- 57 一日、忽呼師至丈室曰、我有古人公案要與你商量。師擬進語、潭遂喝。師豁然領悟乃大笑。潭下繩牀、執師手曰、汝會佛法邪。師便喝、復拓開、潭大笑。(卷十八、天童普交禪師章)
- 58 悅爲人短小、公會見龔德莊說其聰明可人、乃曰、聞公善文章。悅大笑曰、運便失却一隻眼了也。(卷十八、張英商居士章)
- 59 悅曰、既於此有疑、其餘安得無邪。祇如巖頭言末後句、是有邪是無邪。公曰、有。悅大笑、便歸方丈、閉却門。(卷十八、張英商居士章)
- 60 覺一日問師、高高峰頂立、深深海底行。汝作麼生會。師於言下頓悟曰、釘殺脚跟也。覺拈起拂子曰、這箇又作麼生。師一笑而出。(卷十八、信相宗顯禪師章)
- 61 時圓悟爲侍者、師以白雲關意扣之。悟曰、你但直下會取。師笑曰、我不是不會、祇是未諳、待見這老漢、共伊理會一上。(卷十八、信相宗顯禪師章)

十八、信相宗顯禪師章)

62 公笑曰、却了不得也。通曰、即現宰官身而爲說法。公曰、人人有分。通曰、寫底是字、那箇是經。公笑曰、却了不得也。通曰、即現宰官身而爲說法。公曰、人人有分。通曰、莫謗經好。公曰、如何即是。通舉經示之。公拊掌大笑曰、噯。(卷十八、彭汝霖居士章)

63 師誦曰、我有明珠一顆、久被塵勞關鎖。今朝塵盡光生、照破山河萬朵。歧笑而趨起。(卷十九、白雲守端章)

64 走見白雲、雲爲手舞足蹈、師亦一笑而已。師後曰、吾因茲出一身白汗、便明得下載清風。雲一日示衆曰、古人道、如鏡鑄像、

像成後鏡在甚麼處、衆下語不契、舉以問師、師近前問訊曰、也不較多。雲笑曰、須是道者始得。(卷十九、五祖法演章)

65 師曰、我本不去、被你賺累我、遭這老漢詬罵、悟呵呵大笑曰、你記得前日下底語麼。(卷十九、太平慧勲章)

66 師曰、無人奪你鹽茶袋、叫作甚麼。鑑曰、佛果若不爲你說、我爲你說。師曰、和尚疑時、退院別參去。鑑呵呵大笑。(卷十、九華藏安民章)

九華藏安民章)

67 慧以舉道者見琅邪并玄沙未徹語詰之。師對曰、慧笑曰、雖進得一步、祇是不著所在(卷二十、教忠彌光章)

68 慧曰、公祇知有格物、而不知有物格。公茫然、慧大笑。(卷二十、張九成章)

69 問曰、空手把鋤頭、步行騎水牛、人從橋上過、橋流水不流、意作麼生。師鞠躬曰、所供並是詣實。眼笑曰、元來是屋裏人。

(卷二十、靈巖仲安章)

70 堂曰、相公去便了、理會甚坐與臥耶。公笑曰、法兄當爲祖道自愛。遂斂目而逝。(卷二十、錢端禮章)

71 師舉拳。悟曰、此是老僧用底、作麼生是從上諸聖用底。師以拳揮之、悟亦舉拳相交、大笑而止。(卷二十、徑山寶印章)

④河盛好藏著『エスプリとユーモア』(岩波新書、一九六九年)四十二頁—四十九頁參照。

⑤梅原猛著『笑いの構造』(『梅原猛著作集』I、(集英社、一九八三年)參照。

⑥Une dorte de Mozart tibetain 中沢新一著『森のパロック』(せりか書房、一九九三年)參照。

⑦岩波書店刊『アリストoteles全集』8(一九六九年版)三五四頁參照。